

石狩市におけるエコミュージアム構想の胎動

—プロジェクトMの取り組み—

The launching process of Ecomuseum in Ishikari city and its prospects

—A case study of Project M—

津々見 崇^{*1}・伊井 義人^{*2}・志賀 健司^{*3}

Takashi TSUTSUMI^{*1}, Yoshihito II^{*2} and Kenji SHIGA^{*3}

要 旨

本稿は、“市民主体による、地域遺産のまるごと博物館”であるエコミュージアム（EM）の設立に向けて石狩市で活動するグループ・プロジェクトMの初頭期の活動についてまとめ、今後の可能性を考察するものである。市文化財保護審議会答申を下地として始まったプロジェクトMでは市民・学芸員・大学研究者らが協働し、毎月のワークショップをはじめ、子ども向け・大人向けのスタディ・ツアー、道内先進地視察、古老への聞き取り調査、石狩遺産の学習・選定などに取り組んできた。今後の展開においては、次代のまちづくりに資するEMとすること、知的好奇心や交流満足度を満たす市民主体の活動を続けること、メンバーの輪を広げて持続性を高めること、展示を超えて遺産の保全活動へと展開すること、構想づくり・組織固め・予算獲得といった活動の枠組みを整えること、が肝要であり、EMづくりのプロセスや発展的活用にも意義があることが示唆された。

キーワード：エコミュージアム、プロジェクトM、スタディツアー、石狩遺産、浜益

0. はじめに

エコミュージアムという言葉がある。日本では25年ほど前から使われている。「エコ」と「ミュージアム」という単語には、多くの人が親しみをもっていると思われるが、これらが二つ繋がって一つの言葉を作ると、その定義は曖昧さが増してしまう。

エコミュージアムの定義は多様だが、大原（2003）は、「博物館としての活動（収集保存・調査 研究・展示教育普及）」「地域内遺産の現地保存」「住民の主体的参加」の関係性から成り立つと述べている。これらの要素は、それぞれが別々に存在するのではなく、関連しあってこそ、エコミュージアムとしての特性が発揮できるとされる。このような壮大かつ曖昧な目標に向かって

果敢に取り組んでいる「プロジェクトM」を、本稿で紹介したい。

プロジェクトMの始まりにはいくつかの背景がある。しかし、直接的には本稿の執筆者の一人でもある「いしかり砂丘の風資料館」学芸員の志賀の呼びかけで2013年から開始された取り組みである。その呼びかけで、「何か面白そうなプロジェクトが始まるらしい」という思いを胸に、現在も活動が続けているメンバーは、初回のワークショップに参加することとなる。その後、月一度のワークショップを中心に一年以上、プロジェクトMは継続している。石狩市の広報で告知し、一般の地域住民を連れて、浜益区へツアーも実施した。このようにプロジェクトMは継続的かつアクティブに活動している。

しかし、エコミュージアムの定義の曖昧さ故

^{*1} 東京工業大学大学院情報理工学研究科 〒152-8550 東京都目黒区大岡山2-12-1

^{*2} 藤女子大学人間生活学部 〒061-3204 北海道石狩市花川南4条5丁目

^{*3} いしかり砂丘の風資料館 〒061-3372 北海道石狩市弁天町30-4

か、プロジェクトMの目的や方向性は明確には決まっていない。ワークショップでも、何度か、プロジェクトの目的や方向性を定める必要性に関する議論も出てきた。ただ、未だ結論には達していない。

そのような背景を受け、本稿はプロジェクトMの目的や今後の方向性を定める土台として、これまでの活動を振り返る。そのためにも、第一にプロジェクトが開始された背景、第二にプロジェクトのこれまでの取り組み、第三にプロジェクトの今後の可能性を考察したい。

このプロジェクトMに限らず、地元市民を母体とする取り組みを進めるにあたっては、明確な目的の設定と同時に、多様な意見の反映という、一見、相反した仕組みが肝要となる。本稿では、これらの仕組みを、今後プロジェクトMが構築していく一助としたい。なお、筆者のうち、伊井と志賀は開始当初から、津々見は1ヶ月ほど遅れて東京から、このプロジェクトに参加している。

1. プロジェクトMの前身

最初に石狩市のような地方自治体が設置する博物館の役割を確認しておきたい。

博物館（ミュージアム）の機能とは、資料の収集保管、調査研究、教育普及（展示も含む）であり（加藤ほか編，2000），特に地方自治体が設置するような地域の博物館においては、通常、その地域の自然や歴史を現在と未来に伝えることが役割として求められる。

そのような博物館の機能を踏まえた上で、石狩市の博物館機能を振り返ってみたい。

現在の石狩市は、2005年に旧来の石狩市と、当時の厚田村、浜益村とが合併して形成された。合併以前は3市村それぞれに「郷土資料室」などの名称の博物館類似施設が設置されていた。いずれも近代以降の漁具・農具、生活道具の展示を主体とし、展示と収蔵以外のスペース（教育・研究などに利用する場所など）は存在せず、学芸員も配置されておらず、施設は旧庁舎や鯉番屋など古い遊

休施設を流用した老朽化が進んでいるものであった。

3市村合併を前にして、2003年、道路拡幅による立ち退きのため「石狩市郷土資料室」は閉鎖され、それに代替するように2004年、「いしかり砂丘の風資料館」がその近接地に開館した。常駐の学芸員は配置されたが、建物は閉鎖されたレストランを流用したものであり、施設・設備としては根本的に過去の資料室と同様の問題点を抱えたものである。

旧厚田村、旧浜益村の博物館類似施設は、合併後に展示内容のリニューアルは実施されたが、「厚田資料室」「はまます郷土資料館」として、施設・設備と体制はそのまま継承されている。

では、そのような博物館（郷土資料館）は、どのような問題点を抱えているのであろうか。現在も継続している石狩市の3資料館の問題点を整理すると、次のとおりである。

「建築物」自体については、以下の二つの課題があげられる。

- ・ 3館とも築年数が長いため、建物本体や設備の老朽化が著しい（雨漏り、屋根・土台等の損壊の発生、空調設備の不調、耐震能力など）
- ・ 元来は用途の違う建物（番屋、役場庁舎、レストラン等）を流用しているため、構造やレイアウトが博物館に不都合が点が多い（動線、屋内の物理環境、大型資料の搬出入設備など）

「設備」の課題については、以下の三点である。

- ・ 資料・標本を保管するに耐えるスペースがない（広さ、温度・湿度、光、耐震、気密等の問題）
- ・ 資料や標本、地域の自然や歴史の調査研究のためのスペース・設備が全くない
- ・ 講座や実習を実施するためのスペース（講義室・実習室）が全くない

博物館の役割を考えると、上記三点は博物館として機能するには致命的な問題点である。特に、

研究・教育機能を維持するためには、非常に困難を抱えているといえる。

「展示内容」（学芸員が配置されているいしかり砂丘の風資料館を除く）については以下の二点が課題である。

- ・ 対象が郷土史、漁具・農具、生活道具等に偏り、各地区（旧3市村）の自然や歴史・文化の多様性が示されているとはいえない
- ・ 展示手法は資料を並べて名称を表示する程度で、十分な解説文はない。展示解説やリファレンス対応をする職員はいない。

以上の、計七点の問題点を認識した石狩市教育委員会は、2010年度からの石狩市教育プランに、基本計画の1項目として「資料館体制の検討／施設のリニューアルや市全体の資料館の再編成を含めた文化財資料の保存・展示のあり方の検討」を位置づけた（石狩市教育委員会、2010）。そして2011年、市教育委員会から石狩市文化財保護審議会へ「これからの石狩市郷土資料の保存・展示のあり方等について」として諮問されることとなった（石狩市教育委員会、2011）。

この文書の別紙には諮問の経緯や内容として、「老朽化や入館者数の伸び悩みなどさまざまな問題が生じていること」、「資料館は、市民にとってどのような場所であるべきなのか」、「どのような機能をもつべきなのか」、「資料の保存・活用のあり方並びに資料館の配置について検討」などと記載されている。

以上のような内容の諮問を受けた市文化財保護審議会は、2011年度から2012年度の二年間に渡り5回の会議を開催して、協議を行なった（厚田区（旧厚田村）、浜益区（旧浜益村）への現地視察1回を含む）。

その結論として、まず2011年12月14日付で中間答申が審議会から教育委員会へと出された（石狩市文化財保護審議会、2011）。その主な内容は以下のとおりの方向性に要約できる。

第一に「地域の郷土資料の活用とネットワーク」に関する方向性である。各地域の郷土資料は

それぞれ離れていても、収蔵品をはじめとして、様々な関連性を持っている。それらを理解し活用するためには、結びつけるネットワークが必要であるという点である。

第二の方向性としては「資料館のあり方について」が提示された。つまり、これまで意識されてこなかった三つの資料館の関連性をネットワークの要となる施設（資料館）を設置することを通して、構築するという指針が提示されたのである。この施設が「核」となって市域全体を石狩の博物館と捉え、市内外への情報発信と文化財保護、文化の振興を図る必要があるとの考え方が示された。

そして、中間答申から1年強が経過した2013年3月18日付で、最終的な答申が提出されたのである（石狩市文化財保護審議会、2013）。その最終答申の内容は以下の三点に要約できる。

- ・ 「郷土資料」とは、有形文化財や標本等に加え、屋内展示・収蔵が不可能な史跡や建築物、伝統芸能、生態系、地形・地質などを広く含めた自然遺産・文化遺産のことである
- ・ 郷土資料の保存・展示における問題点を解決し、郷土資料がもつ価値を発揮させるには、必要な施設整備とともに、長期的・総合的な考え方に立った手法が必要
- ・ その手法とは、市内全域に分布する郷土資料（自然遺産・文化遺産）と資料館・図書館・公民館などの社会教育関連施設がネットワーク化を進め、石狩市全域を「まるごと博物館」として活用することである

ここで、はじめて「まるごと博物館」という概念が登場することとなる。そしてそれを実現するためのネットワーク構築には、次の四つの要素が必要とされた。

1. 石狩・厚田・浜益の3地区に所在する郷土資料（自然遺産・文化遺産）
2. 3地区の郷土資料の情報を集約し、展示し、訪問経路等を紹介する、各地区におい

て中心となる施設。当面は現存の3資料館を活用

3. 収集保管・調査研究・学習などの機能を十分に備えた、ネットワークの要となる施設。図書館・公民館・海浜植物保護センターなど社会教育関連施設と連携し、専用に設計された新たな施設が必要。石狩市民図書館と隣接した位置が望ましい。
4. 各地区の郷土資料の価値を再発見し、市内外に伝えていく役割を担う、市民、及びそのための人材育成。

答申では望ましいあり方として、「各地域の郷土資料を結びつけるネットワーク」と「要となる施設」で構成された「市民が伝えていく」「まろごと博物館」という表現がされている。これはまさに「エコミュージアム」といえる。

このような背景から、石狩市文化財保護審議会からの答申を具体化し、実現するには、市民が主体となって「街の魅力」となる自然遺産・文化遺産を見直し、活用する方法を考えていくことが欠かせないとの考えに至ることとなる。

そこで石狩市教育委員会は、市民からメンバーを募るワークショップを企画した。開催は2013年度後半の半年間、月1回程度の予定とし、市広報誌（「広報いしかり」2013年9月号）にメンバー募集記事を掲載した。

ワークショップの名称は「プロジェクトM：まちの魅力を見つけ出せ！」である。「M」は表面上、「**M**achi no **M**iryoku wo **M**itsukedase!」から由来していると説明しているが、その真意は「**M**useum」である。さらに遡ると2003年から2005年、いしかり砂丘の風資料館（2003年は文化財・博物館開設準備室）で3シーズンに渡って開催した、小学生向けの連続体験講座「プロジェクトM：博物館をつくれ！」に起源を持つ名称である。これは小学校高学年を対象にして各年5～6回のシリーズで構成された講座で、その内容は標本製作、展示製作、博物館のバックヤード見学（北海道開拓記念館の収蔵庫等）、自分の夢の博物館の企画・設計と模型製作などであった。市民

に博物館の役割や必要性に気づいてもらおう、という意図で実施したものであった。

2. プロジェクトMの始動

以上の経緯のもと、プロジェクトMは、2013年11月に第一回のワークショップを実施した。そこには、環境保全や地質、歴史、遺跡発掘などに興味がある石狩市民など12名が参加した。その後は年度末まで、下記の通り、5回のワークショップと2回の番外編を実施することとなる。

①石狩市の自然遺産・文化遺産をリストアップせよ！（2013年11月27日）

②遺産めぐりコースを考えよ！（2013年12月20日）

番外編① エコミュージアム懇談会
（2013年12月26日）

番外編② 厳寒の厚田・浜益バスツアー
（2013年12月27日）

③遺産めぐりコースマップをつくれ！
（2014年1月15日）

④石狩のエコミュージアムの可能性を探れ！
（2014年2月19日）

⑤エコミュージアムのポスターをつくれ！
（2014年3月19日）

月一回のワークショップでは、志賀を含む砂丘の風資料館の学芸員が3名、市民メンバーが約6～7名、そしてアドバイザーとして大学教員2名が参加していた。通常、志賀から上記のようなテーマ設定が提示され、参加者がグループワークをしていく。会場は旧花川中学校で年季が入った建物が自慢の石狩市公民館で、18時から20時過ぎまで作業は続いた。冬期間は、ストーブは常に稼働しているが、少し離れると寒さは感じざるを得ない。初冬（11月頃）から春前（3月）にかけてのワークショップへのアクセスは地方部だけではなく、都市部でも北海道では路面状況の面で難しい。そういった背景もあり、参加者数は決して大人数ではないが、毎回参加するコアメンバー（市

民5名程度)もいた。ただし、参加者の裾野を如何に広げていくかは、ワークショップでも話題として取り上げられてきたが、まだ明確な解決策を持ちえていない。

それでは、簡単に各回のワークショップを紹介したい。第一回目は「プロジェクトMのミッション(任務)」が最初に学芸員の志賀より、提示された。そこでは①石狩の自然遺産・文化遺産マップを作れ!、②遺産をつなぐ博物館を作れ!という二つが提示された。そして、プロジェクトの意義として「石狩の自然遺産・文化遺産を『学び』『発見し』『大勢に知ってもらい、未来に残していく方法』を皆んなで考える」ためであることを確認した。具体的な作業としては、志賀が作成してきた「バラバラ」の石狩地図(2万5千分の1地形図, 11枚分)をパズルのようにつなげ合わせることから始まった。地図は、昔、美術室に配置されていた5~6人が作業できるほどの机にも乗り切らない長さで、参加メンバーは改めて、石狩が南北に広がる街であることを認識した。その後、「遠くからの友人が石狩に来たとしたら、どこに連れて行きますか?」というお題が提示され、一人ひとりが、地図上にピンをさし、そこから自然遺産・文化遺産のリストアップを進め、参加者一人ひとりがそのお薦めポイントを紹介した。この作業だけで78ものポイントがリストアップされた。この第一回目に先立って、志賀と伊井は、グループワークの方法や資料提示のタイミングなどを打ち合わせしていた。本来ならば、これは毎回継続するべきであったが、最初の一回目への準備のみで、それ以降は事前会合を持てなかった。

第二回目からはグループワークに加え、「私の“推しM”紹介」という企画が始まった。これは、各メンバーがこれまで訪れた中で印象に残った博物館を10~20分程度で紹介するものであった。この“推しM”は、博物館の事例を学ぶという目的の他に、参加者みんなが発言し、主体的な参加の雰囲気を作ることを意図していた。最初回は、砂丘の風資料館学芸員の荒山千恵さんによる

ベルリン民族学博物館(ドイツ)だった。その後、プロジェクトMに必須のキーワード「エコミュージアム」について、志賀から説明があった。そして、参加者を二つのグループ(クマさんチーム、サケさんチーム)に分けて、前回提示されたポイントを参考にし、それぞれを繋ぎあわせながら、モデルコースを作っていった。クマさんチームは、厚田から浜益も含めた石狩の食を重視した「ふらっと食べ歩きコース」、サケさんチームは、石狩の農業遺産に着目した「石狩の秘境めぐりコース/農業史跡編」を計画した。兎に角、試行錯誤をしながら、地元の遺産を知ることが重要であることを認識することとなった。

年が明けて、第三回目の「推しM」では、参加メンバーの安田秀司さんが、薩摩焼で有名な鹿児島県「美山(みやま)」をテーマに紹介した。この地域は多くの窯元があり、それらを有機的に繋げ、観光客を楽しませていることから、エコミュージアムの先進事例としても興味深いものであった。その後のグループワークでは、前回、作上げたモデルコースを吟味し、マップを作るところまで進めた。「ふらっと食べ歩きコース」では①朝市コース、②資料館めぐり(温泉・グルメ付き)コース、③一泊コースが、サケさんチームは「石狩の農業遺産コース」と名称を変え、①石狩横断ダイナミック(自動車)コース、②花畔・花川(自転車)コースが提示され、そのコースの特色がプレゼンテーションされた。

第四回目には北海道教育大学の鈴木明彦教授と学部生の野村直矢さんに、「石狩地方のジオサイト」について、ご講演いただいた。石狩市内の様々な地質や、当地で発掘される化石の特色とともに、それらの観光資源としての可能性に言及されていた。この講演を通して、エコミュージアムは、市民の運営への積極的な関与を前提としながらも、そこには高い専門性が不可欠であることを実感した。「推しM」は志賀が福井県立恐竜博物館、足寄動物化石博物館(北海道)を紹介した。この回は、講演会と推しMで時間切れとなり、グループワークはなく、次回に持ち越しと

なった。

第五回目には、「推しM」は加藤和子さんが三内丸山遺跡（青森県）を紹介した。彼女は、石狩市内の石狩紅葉山49号遺跡の発掘現場で働いていた。その経験を元にした、臨場感溢れる言葉で、紹介をしてくれた。最終回ということもあって、急ぎ足でミュージアムのデザインを考えるグループワークを行った。デザインと言っても、建築場所、内部の間取りなどイメージを発表するに留まることとなった。

なお、2013年の年末には、番外編として懇談会とバスツアーを一度ずつ開催した。この時から、都市計画・観光まちづくりを専門としている研究者の津々見も参加することとなった。津々見は、国内外における地域資源の活用手法を研究しており、石狩の多様な資源をエコミュージアムとしてまとめ、それを市民や地域が活用するという観点から協力することとなった。この懇話会では、石狩市内には、観光協会や観光ボランティアガイドなど、直接的にプロジェクトMの活動と連携可能な組織が多く存在することを確認した。その上で、プロジェクトM独自のエコミュージアム設立の意味を再考する必要性を認識するに至ることとなる。

また、バスツアーでは伊井が所属する藤女子大学のバスを利用し、専門家4名（大学教員3名、学芸員1名）、石狩市民5名、藤女子大学学生2名の計11名が参加した。当日のルートはカシワ林（石狩市志美）のスノーシュー探索→旧厚田油田跡→厚田資料室→昼食（浜益）→岡島洞窟→浜益支所→はまます郷土資料館→荘内藩陣屋跡→浜益川橋上からの黄金山を半日かけて巡った。12月末という厳冬期の厚田・浜益地区での観光資源としての可能性を考えるためのツアーの企画・実施には、プロジェクトMのメンバー自身が経験を積むという意味で、一定の価値があったと考えている。また、既に冬季閉館中の資料館を厚田支所・浜益支所の協力で特別に開けていただくなど、様々な連携によって実現したツアーとなった。

特に浜益地区では、プロジェクトMの中心メン

バーの一人であり、地元の郷土史に詳しい佐藤睦さんの説明を受けながら、ニシン漁が最盛期の頃や荘内藩が陣屋を同地に構えていた頃に思いを馳せることもできた。また、二名という少数ではあるが、大学生が参加することによって、地域住民の方々との情報交換を通して、彼女たちが何時も通学している場所である石狩市の魅力を知る切っ掛けを提供できたといえる。彼女たちの存在は、環境保全や歴史などに関心を持つプロジェクトMのメンバーにとって、新たな視点をもたらす切っ掛けになれば良かったのだが、なかなか継続的にプロジェクトに参加してもらうことは難しいのが現状である。

3. プロジェクトMの本格始動

2014年度には、前年度の活動を受継いだ活動に加え、エコミュージアムとして市民にアピールするような活動も始まった。会議の告知や次第にも「ミッション」「まちの魅力を見つけ出せ!」といった、いわばスパイ映画のようなフレーズが用いられて気分が高められたため、会議は4月より「作戦会議」の呼称が用いられるようになり、また2ヶ年目に当たるため、当年度は「シーズン2」と称された。

前年度の活動からの継続という観点では、いしかり砂丘の風資料館においてプロジェクトMの活動を紹介するテーマ展が、志賀より提案された。そこで4月の作戦会議では展示パネルのデザインの相談から議論をスタートし、次のステップとしてエコミュージアムの具体的な内容の検討に着手した。年間の活動概要は次の通りである。

- ① シーズン2・第1回作戦会議「2013年度のプロジェクトMのおさらい・プロジェクトMの方向性について」（2014年4月16日）
- ② 第2回作戦会議「プロジェクトM紹介展示用マップパネル作成・夏秋の活動予定について」（2014年5月21日）
- ③ 第3回作戦会議「プロジェクトM紹介展示用

マップパネル作成・夏秋の活動について」
(2014年6月18日)

- ④ 三笠ジオパーク視察・第4回作戦会議「夏休み
石狩ツアーについて」(2014年7月16日)
- ⑤ 「自由研究応援！夏休み石狩ツアー」実施
(2014年8月16日)
- ⑥ 「浜益昔語りの夕べ」実施・第5回作戦会議
「ヤン衆体験合宿」(2014年8月17～18日)
- ⑦ 「浜益・海の魅力発見ツアー」実施(2014年9
月21日)
- ⑧ 第6回作戦会議「石狩遺産紹介演習・夏秋の活
動の振り返りと今後の方向性・メディアづくり
について」(2014年10月15日)
- ⑨ 第7回作戦会議「石狩遺産紹介演習・【浜益・
海の魅力発見】パンフレットづくり・石狩遺産
のまとめ方について」(2014年11月12日)
- ⑩ 第8回作戦会議「石狩遺産紹介演習・【浜益・
海の魅力発見】パンフレットづくり・石狩遺産
選定について」(2014年12月10日)
- ⑪ 第9回作戦会議「石狩遺産選定・【浜益・海の
魅力発見】パンフレットづくりについて」
(2015年1月14日)
- ⑫ 第10回作戦会議「石狩の魅力発見講演会&談話
会・【浜益・海の魅力発見】パンフレットづく
り・石狩遺産選定について」(2015年2月12日)
- ⑬ 第11回作戦会議「石狩の魅力発見講演会&談話
会・【浜益・海の魅力発見】パンフレットづく
り・石狩遺産選定について」(2015年3月12日)

以後、主な活動について詳しく見ていくことと
する。

(1)三笠ジオパークの視察

まずは道内でエコミュージアムや類似の取組み
を既に行っている地域の視察を行うことになっ
た。6月の作戦会議にて北広島市エコミュージア
ム、アポイ岳ジオパーク、三笠ジオパーク等が候
補として紹介され、検討の結果、三笠ジオパーク
と関連歴史資源を視察先として選定した。

ジオパークは、「ジオ(地球)に親しみ、ジオ

を学ぶ旅、ジオツーリズムを楽しむ場所」(日本
ジオパークネットワークHP)と定義され、主に火
山や鉱物、温泉などの地質資源を核としながら、
当地での歴史や産業など、地質資源を巡る生活ま
でをひとまとまりに見せるための取り組みであ
る。2015年3月現在、北海道内では洞爺湖有珠
山、アポイ岳、白滝、三笠、とかち鹿追の5ヶ所
が日本ジオパークネットワークの審査に合格し、
ジオパークとして活動している。前述の通りジオ
パークは、ジオと名乗りながらも、産業や生活と
いった地質と人間との関わりに着目し、広い種類
の資源をまとめてパッケージ化し、来訪してもら
う仕組みであるため、エコミュージアムと理念・
内容において共通する部分が少なくない。そのた
め、メンバーより視察先として紹介があり、活動
内容や施設、経歴、石狩からの距離等を勘案し、
訪問することとなった。

三笠ジオパークは、前述のように地質資源や化
石のみならず、石炭の歴史、北海道開拓初期の歴
史を取り込んだジオパークであり、スタディーツ
アーも盛んに行われている。かつて石炭で栄えた
が、その後、関連施設は廃墟状態になっており、
市民からは過去の遺物、「早く撤去してほしい」
ものとして扱われてきた。しかし2000年代以降、
市の歴史上重要な資源として再評価・活用される
ようになり、ジオパーク設立に至っている。そし
て「自分たちの地元にあるものの関心がない」資
源に対する市民の再認識ツールとしてジオパーク
が取り組まれたという経緯があり、この点から、
石狩のエコミュージアム立ち上げに際しての参考
になる事例である。さらに、三笠市を含む空知地
域では「そらちヘリテージツーリズム」がNPO法
人炭鉱の記憶推進事業団によって進められてお
り、旅行業免許を取得して着地型観光としての教
育旅行プログラムや、学習副読本『そらちでまな
ぶ』も発行し、地域内外への学習機会の提供を行
うなど(炭鉱の記憶推進事業団、発行年不詳)、
石狩のエコミュージアムの展開を模索する上で、
重要な示唆が多く含まれている。

視察は2014年7月16日(水)に行われ、メン

バー 9 名及び大学院生 4 名が参加，三笠ジオパーク推進協議会事務局・下村圭氏（市職員）のガイドにより市内のジオサイト（補注 1）を巡った（写真 1）．三笠ジオパークは三笠市の全域に展開し，六つのエリアに分けられている．1 日の行程ではこれら全てを視察することが難しいため，表 1 のジオサイトを見学，加えて行程の終りに学芸員によるレクチャーを受けた．

ジオサイトの見学はまず，幌内エリアから始まり，旧国鉄・JR 幌内線の軌道を活用した三笠トロッコ鉄道を試乗，三笠鉄道記念館まで移動した．そこから徒歩で炭鉱の産業遺産を見学し，旧幌内炭鉱変電所の建屋内で，遺産保全活動に取り組んでいる市民団体「みかさ炭鉱の記憶再生塾」



写真 1. 説明を受けながらジオサイトを巡る。



写真 2. 奔別炭坑跡のホッパーを見学。

表 1. 三笠ジオパーク視察における訪問先。

【幌内エリア】

クロフォード公園（旧幌内線三笠駅），
三笠トロッコ鉄道，旧北端幌内炭鉱施設跡

【幾春別・奔別エリア】

旧奔別炭鉱

【野外博物館エリア】

野外博物館（地層・石炭・炭鉱等），
三笠市立博物館（化石，炭鉱資料等の展示）

事務局・伊佐治知子氏より，建物の由来や保全活動の経緯等について説明を受けた．特に活動の進め方に関しては，行政をはじめとする地元各方面との連携に関する課題が紹介され，多様な資源を包含するエコミュージアムを設立・運営するのに際し，地元の各組織との連絡・連携が大切であることを学ぶことができた．

その後，幾春別・奔別エリアの旧住友奔別炭鉱立坑槽およびホッパー（貯炭槽及び積出し設備）の見学（写真 2）を挟んで，野外博物館となっている幾春別川沿いのコース（森林鉄道跡を活用）を巡り，幾春別炭鉱錦立坑槽跡等の石炭関連のジオサイトに加え，「幾春別層」「垂直な地層」「ひとまたぎ 5 千万年」といった地質学上特徴的なジオサイトを，解説を受けながら見学した．いずれのポイントにおいてもガイドが説明を行ったが，説明の仕方・内容は今後石狩のエコミュージアムにおいて案内を行うことが想定されるメンバーにとって，大いに参考になるものであった．

視察の最後に，三笠市立博物館において栗原憲一学芸員（三笠ジオパーク推進協議会事務局員を兼務）より，ジオパークの意義や三笠における取り組みの紹介があり，ジオパークに取り組むことに対する「過度な・誤った期待をすることへの注意」と，「ジオパークになることによってそれを利用し，自分たちで地域を変えていく決意が大切」である旨が説かれた．このことは，エコミュージアムにも同様に当てはまると考えられ，単にエコミュージアムを立ち上げるだけでなく，

その先を見据えた取り組みが大事であること示唆するものであったといえる。

なお三笠ジオパークの運営では、市民がボランティアガイドとして参加していたり、元炭鉱マンが解説をしたりと、行政や市立博物館がまとめ役を担いながらも、市民が随所で活躍する機会が担保されており、行政単独の事業に比べ、市民の関心を高め、市民生活へのより強い影響を期待することができると思われる。

(2)自由研究応援！夏休み石狩ツアー

2ヶ年目を迎えるプロジェクトMの活動において、活動をグループ外に拡げること（アウトリーチ活動）が一つの重要なタスクとなっていた。そこで6月の作戦会議において検討が行われ、実施されたのが「自由研究応援！夏休み石狩ツアー」である。これは、夏休みの宿題の定番である「自

由研究」の材料に、石狩のエコミュージアムを構成するであろう地域資源を取り上げてもらい、調べ学習や成果物作成の手助けをプロジェクトMとして行うイベントである。ツアーの行程に関しては、6月までに作成した「遺産めぐりコースマップ（パネル）」を活用し、子どもの参加という前提条件を踏まえたコンパクトなものにすることを基本方針とすることにし、はまなすの丘公園・石狩浜、いしかり砂丘の風資料館、石狩浜海浜植物保護センターをフィールドとして決定した。

内容は、コースマップに掲載された資源を基調としつつも、メンバーが案内・解説を行うことから、その普段の活動分野や専門知識を活用することとし、かつ子どもにでも理解可能なもの、そして自由研究として成果にまとめることができるもの、という条件から検討が行われた。その結果、①石狩浜の自然観察、②ビーチコーミング（漂着



写真3. メンバーによる説明を聞きながらの植物観察。



写真4. 漂着物を使ったオブジェづくりの様子。

いくつ見つけることができるかな？ 見つけた植物のシールを貼ったリスケッチしてみよう。

いつも砂が動いている場所に生えている植物			

どんな自然物を見つけましたか？

石狩湾から打ち上げられた	海流に乗って南から来た	石狩川から流れて来た

漂着物から、浜辺の環境について思ったことを書いてみよう！

図. 植物観察用のワークシート（A4）。

物拾い)と漂着物に関するレクチャー, ③漂着物を使ったオブジェづくり, の三つを行うことになった。

実施に先立ち, 「広報いしかり」2015年8月号に告知を掲載, 小・中学生の親子を対象に参加者を募集した。また, 事前準備として, 上記①②に用いるワークシートの制作(主に自然環境学の専門家である斎藤和範さんが担当), ①②の解説内容の準備及びワークシート用の植物シールの制作(主に海浜環境保全活動を行っている石井滋朗さん及び志賀が担当), ③の材料準備(海浜植物保護センター職員である藤彰矩さんが担当)を行った。

ツアーは北海道内の学校の夏休み終了目前の8月16日(土)に催行され, 小学生2名, 未就学児2名, 及びその家族3名が参加した(他に, 当日不参加となった応募者が1名)。一方メンバーからは9名が参加した。当日はまず, いしかり砂丘の風資料館に集合し, オリエンテーションとビーチコーミングのレクチャー(約20分)を行った後, はまなすの丘公園へ移動し, 植物観察を開始した。同公園内の観察路に沿って歩きながら, メンバーが逐一植物について説明し, 参加した子どもはワークシートにメモを取りながら話を聞く, というスタイルで約1時間, 浜の植物の特徴について学んだ(写真3)。

次に砂浜へ出て, ビーチコーミングに移り, 貝殻や木の実, 石炭, 生物の死骸, ガラスやプラスチック等の人工物などを約1時間にわたって収集した。その後これらを資料館に持ち帰り, 洗浄や分類を行った後に, 志賀が漂着物の同定を行いながら子どもたちに解説を行い(約45分), 子どもたちは分かったことをワークシート(図)に記入したり, 見つけた植物のシールを貼ったりして, フィールドワークの成果をまとめた。

昼食を挟んで午後は石狩浜海浜植物保護センターを会場として, 拾った漂着物を使って思い思いのオブジェを制作した(写真4)。当初2時間ほどを予定していたが, 子どもたちの創作意欲は高く, あっという間にいくつもの作品を作り,

拾ってきた漂着物をほぼ使い果たしたこともあって, 早めに予定を切り上げて, 制作終了となった。制作した作品は, 参加者が持ち帰り, 自由研究作品として使えるようにした。

参加した2名の小学生(1年生及び2年生)の回答したアンケートでは, 二人とも「とても楽しかった」「工作(オブジェづくり)が楽しかった」と回答し, 解説についても「よく分かった」「だいたい分かった」と答えていることから, ツアーの趣旨が概ね伝わり, 石狩の浜辺を楽しみながら巡って実物を見たり触れたりすることができ, また学習イベントとしても機能していたのではないかと考えられる。

(3) 浜益昔語りの夕べ・ヤン衆体験合宿

プロジェクトMの2年目の対外的活動の二つ目として次節で詳説する「浜益・海の魅力発見ツアー」を6月の作戦会議で企画した。その実施に先立ち, 浜益のニシン漁や歴史をさらにメンバーが学び, またツアーの詳細を検討することを目的として, 8月17日(日)~18日(月)に合宿を行った。参加メンバーは8名であった。

一日目は, 浜益までの道中に立地する資源の見学から始め, 厚田漁港, 濃昼山道, 濃昼集落・漁港, 送毛海岸, 千本ナラ, 昆沙別川, 雄冬集落・雄冬神社, 白銀の滝を巡り, メンバーが相互に解説しながら全員で理解を深めた(写真5)。こうした共通の理解は, エコミュージアムの資源(サテライトミュージアム)としての展示・活用方法の議論の参考とされる, プロジェクトMの重要な基盤となるものである。

浜益での合宿にあたり, はまなす郷土資料館(旧白鳥番屋)周辺の屋外を会場として, 「昔語りの夕べ」と称し, ニシン漁が盛んだった昭和30年代まで船頭として操業に当たっていた地元の古老・上野満氏を招いて, 当時の様子や風習について話を聞く会を開いた。厚田漁港や浜益の商店で入手した海産物を網焼きし食べながらの気取らない会で, 約2時間半にわたって, 往時のニシン漁の手順や風習, ニシン漁従事者の生活の様態など

について、時折浜益在住のメンバーによる補足等を挟みつつ、上野氏に語ってもらった（写真6）。当時操業に関わった現在存命の経験者はほとんどいない状況において、沖揚げ音頭（ニシン漁作業唄）の実演などもあり、貴重なインタビューの機会であり、後世に伝えるべくビデオ等の記録を行った。

その後、旧白鳥番屋内に会場を移し、メンバーの間で作戦会議を深夜まで行った。ニシン漁当時の若手労働者である「ヤン衆」が寝泊りした番屋にて、当時の気分を体験すること、また普段の作戦会議では限られた時間の中での議論しかできないため、とことん議論を尽くすこと、をねらいとし、当日は番屋に宿泊することにした。

主な議題は7月の三笠ジオパーク視察の振り返り、及び9月に実施するスタディ・ツアーの内容検討であり、深夜まで意見の交換が行われた。プロ



写真5. 送毛山道の峠にある碑を巡検。



写真6. バーベキューをしながらの「昔語りの夕べ」。

ジェクトMにとって遠距離かつ外部からの参加者を募って実施するツアーは初めての試みであり、ツアーのテーマ、訪問地、解説の内容に関する検討を行ったほか、ツアーとしての一日の行程の時間配分や昼食の内容や休憩のタイミング、また役割分担や告知方法等、それまでのメンバー内の活動においてはあまり細かく決めてこなかった内容まで、熱心に話し合われた。

(4)浜益・海の魅力発見ツアー

(3)の合宿において、スタディ・ツアーでは、①浜益ふるさと祭りでの地元の小学生の沖揚げ音頭の実演を見学すること、②シーズン真っ盛りのサケの遡上を観察すること、そして③ニシン漁時代の「石狩遺産」といえる「はまます郷土資料館（旧白鳥番屋）」を訪問し、往時の漁業や浜益の暮らしぶりを学ぶこと、を主な内容とすることが決定し、タイトルは「浜益・海の魅力発見ツアー」とすることとなった。ツアーは2015年9月21日（日）に実施され、『広報いしかり』9月号、ポスター、フライヤーで参加者を募ったところ、15名の市民が参加した。ツアーに際し、伊井が所属する藤女子大学の協力を得て、マイクロバス1台を移動のために使用した。

朝8時に石狩市役所駐車場に集合し、浜益へ向けてバス及びスタッフメンバー用自家用車で移動を開始した。バス車中では、メンバーによるツアーの趣旨・一日の行程、主催のプロジェクトMについてのガイダンスが行われた後、メンバーである資料館学芸員の工藤義衛さんによって、沿線の集落や道路の来歴、地質等、浜益および石狩地方のニシン漁の歴史の概要、沖揚げ音頭の意味等に関して解説がなされた。解説の冒頭で「石狩挽歌」を聞き、馴染みある歌謡曲の歌詞が持つ深い意味が説明されたことで、石狩におけるニシン漁に対して参加者はより強く興味を抱いた様子であった。また同時に、このツアーで浜益を訪れるにあたって、曲の舞台となったような場所が実際に存在し、ストーリーは完全なフィクションではなく、歴史的な事実が背景にあって、関連する実

物を自分の目で確認できるのが今回のツアーであることが述べられた。

浜益に到着後、浜益ふるさと祭りの会場である川下海浜施設イベント広場にて、浜益小学校児童による沖揚げ音頭の実演を鑑賞した。この沖揚げ音頭は、浜益でニシン漁が盛んであった時代の操業の光景を表現したものであり、浜益の代表的な地域文化を分かりやすく伝えており、浜益に到着したツアー参加者にとって良い導入となったものと思われる。

次に、バスで毘沙別集落へ移動し、毘沙別川を遡上するサケの観察を行った。自然資源が対象となるため、メンバーによる事前下見で想定していた場所と離れた河口側で実際はサケを見ることができたが、エコミュージアムの資源を紹介する上で、こうした偶然性に対応できるよう柔軟な案内が必要であることが課題として認識された。観察においては、メンバーのうち、浜益在住の佐藤さん及び自然環境学の専門家である斎藤さん、また資料館学芸員の工藤さんが、臨機応変に解説を行い、参加者からの質問にも答えていた。続いて同様にサケの遡上が観察できる浜益川の浜益実田橋付近へ移動し、観察を行った（写真7）。浜益川は毘沙別川より川幅が広く、この日はより多くのサケを観察することができた。橋の上から川全体を眺めると、80尾ほどのサケがあちらこちらで確認でき、その壮大な風景に参加者も感心して見入っていた。

以上の午前中の行程を追えた後、川下コミュニティセンターでの昼食となった。市役所浜益支所の推薦及び協力により、地元浜益米のおにぎりや鮭汁が地域住民らによってふるまわれた。同じ石狩市内在住の参加者ではあるが、米作が盛んであり、また漁港を有するという浜益の地域性を感じていたように見受けられた。この昼食は元々、同日開催された「千本ナラウォーク」参加者向けに準備されていた当日限定ものであるが、浜益らしさを素朴に表す一つの地域資源と捉えることもでき、エコミュージアムの仕組みを組み立てるうえで、活用の可能性に期待が持てるものであると考

表2. 浜益・海の魅力発見ツアーの行程。
(2014年9月21日（日）催行)

8:00	石狩市役所集合、専用バスで浜益へ 車中、学芸員による解説
9:40	浜益ふるさと祭りで小学生の沖揚げ音頭を見学 祭りの見学やサケ等の特産品の買い物 (自由時間)
10:30	毘沙別川へ移動し、サケの遡上の様子を観察
11:15	浜益川・浜益実田橋へ移動し、サケの観察
12:00	川下コミュニティセンターにて昼食 (浜益米のおにぎり、鮭汁)
13:00	はまます郷土資料館見学 学芸員、地元住民による解説（スライド上映）
14:00	毘沙別の坂路から浜益全景を展望 帰路（途中、濃昼 木村番屋に立寄り外観を見学、 厚田あいロード夕日の丘観光案内所で休憩）
16:00	石狩市役所到着、解散



写真7. 浜益川でサケの遡上の様子を観察。



写真8. 浜益在住メンバーによるニシン漁の時代の解説。

えられる。

続いて午後は、はまます郷土資料館でニシン漁が盛んであった時代の浜益の暮らしについて、佐藤さんの解説を聞き、資料館の見学を行った（写真8）。この資料館は前述の通り、元は「白鳥番屋」といい、網元の白鳥家が開設、ニシン漁に従事する若者（ヤン衆）が寝泊まりした場所である。ニシン漁は昭和30年代初頭に漁獲量の減少とともにほぼ消滅し、番屋もその後放置されていた。1971年に、地元の文化財として修復が行われ、現在では往時の漁業や暮らしぶりのわかる資料館となっている。ニシン漁の時代は既に50年以上昔のこととなり、地元でも当時の記憶を有する住民は、前述の上野氏を含めても少なくなっているが、ツアーでは当時中学生として陸からニシン漁の様子を見ていた佐藤さんが当時の暮らしを解説した。当時の記憶やその後郷土研究を重ねて得た知識をもとに、ニシン漁の様子や暮らしぶりのわかる写真をスクリーンに映写しながら生き生きと語る様子に、ツアー参加者は熱心に聞き入っていた。ツアー自体はサケの遡上のシーズンに合わせて催行されたが、浜益はサケのみならずニシンの文化が根付いていた土地であることが十分に理解された様子であった。

その後は帰路に就いたが、浜益の集落と海岸線を見渡せる高台で自分たちが訪れた土地を振り返る時間や、白鳥番屋と同じ鯨番屋である旧木村家住宅（木村番屋）の外観見学を挟み、最後にバス車内で学芸員メンバーによる一日の振り返りを行って、16時頃に市役所駐車場に到着、ツアーは終了した。

4. プロジェクトMの今後の展開

2章、3章でみたとおり、二ヶ年にかけてプロジェクトMでは多様な取り組みを試行的に行ってきた。いろいろな経験を経た現在では、活動を取りまとめる意味においてのパンフレットづくり、エコミュージアムの基本的要素となる地域資源の整理の意味を持つ「石狩遺産」の選定基準づくり

と資源の選定を当面の目標に掲げ、手を動かしながら石狩におけるエコミュージアムの意義とコンセプトを固めている状況にある。今後の活動の展開を構想すると共に、課題を整理して本稿を終えることとしたい。

(1) 石狩市にとってのエコミュージアム設立の意義

プロジェクトMは目下、市の政策に位置づけられてはおらず、また助成金などの予算を持たない、市民と学芸員、研究者の有志の“熱意”による“任意”の活動として行われているのが実情である。しかし1章で見たとおり、石狩市におけるエコミュージアム設立は「各地域の郷土資料を結びつけるネットワーク」と「要となる施設」で構成された「市民が伝えていく」「まると博物館」づくりという大きな役割が本来は期待されている活動である。加えて、地域資源をネットワークし、市民が伝えるという活動の先には、一般の石狩市民がそれを訪れてふるさとについて学び、そこから気づき・インスピレーションを得て、石狩での自らの豊かな生活を導いたり、次代のまちおこし・まちづくりへと展開していくことが理想であり、これこそがエコミュージアム設立に取り組む意義と考えられる。

特に後者に関しては、まちづくりの第一歩は地域を知ることであり、その役をエコミュージアムが担いうることが理由である。また、地域の資源・遺産をエコミュージアムとしてまとめること自体も重要ではあるが、しかしそれが市民や観光客によって実際に訪問されることが「ミュージアム（博物館）」として必要条件であり、長期的視点で考えた場合に、その訪問経験が何らかの形で活用されていくという展開が起ることを期待したい。石狩の子どもや大人にとっての好奇心に応える学習の場として、あるいは「わがまちの宝」として地元で愛着を持つ機会として、また市民や札幌都市圏居住者にとっての保養や観光の場として、さらに石狩の魅力的な資源を現代生活に適用するための政策・産業のアイデアを考える場として、エコミュージアムが基盤となっていくことを

大きな目標として担保したいと考える。

(2)市民がエコミュージアム設立の主体となること

プロジェクトMが任意の活動として行っているのは、資金や石狩市における位置づけといった面で不安定な要素があるものの、一方では参加しているメンバーの自由な意思で活動の方向性を舵取りできることを意味している。従って、現在当面の目標として取り組んでいるパンフレットづくりや石狩遺産の選定などの活動は、現在のメンバーにとって重要であり、それを達成することが活動の持続性において不可欠といえよう。上記の「まちづくりの足がかり」としての位置づけは長期的な視点から見たものであり、一方で石狩の資源そのものに魅力を感じて活動に参加しているメンバーにとっての有用なツールとして、エコミュージアムが機能することがまず必要となってくる。プロジェクトMのメンバーのバックグラウンドは様々であり、それぞれにこの活動に対する熱意・期待を抱いて参加している。従って、石狩の資源を使ってできる「何か」を形にしていく活動を大事にしていきたいと考える。

現在のところ、遺産検定試験の仕組みづくりやゲーム化、また現地の資源を巡るゲーム的なイベントなど、石狩の地域資源を使って楽しもうとするアイデアを話し合っている段階にある。また従来より、一緒に資源を現地で見学し、地域の人と交流するような活動は、メンバーにとって刺激になり、また満足度も高く、楽しみとなっている。この「石狩を楽しむ」姿勢を大切に、そこへ周囲の市民を誘っていくことで輪を広げていくことが肝要であろう。

このように考えると、エコミュージアムは文化財保護審議会答申で言及され、市全体にとって意義があるものである一方で、市民の知的好奇心や交流満足度を満たすような自発的・主体的な活動であることが、継続を考える上で重要になってくるといえる。

(3)メンバーの輪を広げる

上記のように、市民が主体的に関わっていくことがエコミュージアム設立・運営において大事になってくるが、その持続性を高める意味においても、メンバーの輪を広げることが課題となってくる。これまで市民メンバーとしてプロジェクトMの会議に参加した数は10名余りに留まり、学芸員等の市職員や大学研究者7名がそれを側面から支えている状況である。エコミュージアムの地域資源の楽しみ方に関する多様性と活動の持続性の確保に向けて、より多くの市民メンバーに参加してもらえるような工夫が必要である。2014年度も「海の魅力発見！浜益ツアー」などで石狩の地域資源を巡る楽しみを実感してもらい、プロジェクトMの活動への参加を促すような取り組みをいくつか行なったが、今後もこうした対外的な活動を続けていくことが大事だと考える。あわせてその際には、市民の要望を把握し、その本質を活動へ取り込んでいくよう試みることが求められよう。

さらに、石狩市内で活動する他組織との連携も視野に入れる必要があると考える。「まるごと博物館」であるエコミュージアムの総合性・広範性を鑑みると、全ての情報整理や展示解説を自前で担うことには限界があると考えられると共に、自然環境保全や歴史研究、また生涯学習や観光案内解説などの専門分野別に活動を行う団体との協働や、厚田区・浜益区の地域をベースとした団体との連携を行い、全市的なネットワークを構築することで、より早く、確実なエコミュージアムづくりが可能になるとも考えられる。そのためにも、石狩のエコミュージアムの構想づくりが急務であろう。

(4)地域資源の展示を超えて

ここでは、やや将来に向けたエコミュージアム活動のあらゆる可能性を検討するという視点での考察になるが、エコミュージアムは「博物館」であるという性質上、資源の調査や研究、保全といった活動にまで市民メンバーが手を広げることができるようになれば、石狩市に取ってより意義

深い活動となるものと思われる。石狩市においては従前より『石狩ファイル』の発行などにおいて、いしかり砂丘の風資料館と市民ボランティアが連携し、調査結果を取りまとめて公開する活動が熱心に行われてきているが、これと同様に、学芸員と市民が連携し、新たな資源の発掘と調査・成果公開を何らかの形でできるようになれば、エコミュージアムの資源が継続的に充実することができるであろう。

さらに、石狩遺産の保全活動などへの展開の可能性も考慮して活動を進めたい。自然環境・文化財保全に係る市の予算には限界があるのは自明であり、しかし保全が進まない中で失われていく地域資源が多数あることも危惧される。従って、学術的価値を損なわないレベルをどう担保するか（あるいは、保全しないことによる風化を防止することを優先し、アマチュア学芸員を許容するか）といった検討課題はあるとはいえ、可能なものから資源の保全・保管にエコミュージアム活動を活用していくことも考えていきたい。

(5)活動の枠組みづくりに関する課題

最後に、プロジェクトMによるエコミュージアム活動の持続性確保のために必要な課題をいくつか言及したい。市民が主体となった自由な活動の良さはあるものの、エコミュージアムの資源を巡るのに必要な解説パンフレットやスタディ・ツアーの催行、また古老への聞き取り調査などの活動を継続して行うためには、予算として各種助成金を獲得することが必須である。そのためには定款・役員などの組織として最低条件を整えていくことが必要となってくるため、2015年度以降はこうした作業も意識して行いたい。また、文化財保護審議会最終答申を受けた、市の政策における位置づけもあれば望ましいが、これは市役所内関係部局との調整や市内各種団体との協働の中で適切な形が今後構想されていくものと思われ、「要となる施設」、つまりコア・ミュージアムに関しては、現在のところ設置について市で検討している段階に過ぎない。

(6)まとめ

以上の通り、本稿では石狩市におけるエコミュージアム設立活動に関して、その始動初期の活動をまとめると共に、今後の展開について考察を行った。地域資源を一つのプラットフォームに載せ、市民に対して分かりやすい形でとりまとめ、実際に巡って気づきや学びを促すという点においてはエコミュージアムをつくることは全市民的に意義があるものと認められる。ただしそれは、エコミュージアムを作ることが最終目的ではなく、設立プロセスを楽しみながら、また資源を巡って石狩市に対する気づきを得ていくことを通して、今の生活を豊かにし、次代のふるさと・石狩を構想する一助として活用するという大きな目標に沿って行われることが肝要なのである。それにはこれまでと同様に市民の熱意あふれる参加がなくては実現し得ない。楽しみながらも献身的に活動を支えている市民メンバーの皆さんに賞賛の拍手を送りつつ、これからの活動の発展における協働への強い期待をメッセージとして贈りながら、筆を置くこととしたい。

補注

(1)ジオパークにおいて、滝や地層の露頭などの自然・地質資源、炭鉱跡等の産業遺構、炭鉱住宅などのまちなみ、神社・碑などの歴史資源といった個別の資源は「ジオサイト」と称され、訪問の対象としてジオパークごとのリストに掲載されている。

引用文献

- 石狩市教育委員会, 2010. 石狩市教育プラン. <http://www.city.ishikari.hokkaido.jp/uploaded/attachment/8041.pdf> (2015年3月18日アクセス確認) .
- 石狩市教育委員会, 2011. これからの石狩市郷土資料の保存・展示のあり方等について(諮問)(石教文第68号). <http://dns1.city.ishikari.hokkaido.jp/soshiki/kikaku/758.html> (2015年3月15日アクセス確認) .

石狩市文化財保護審議会，2011. 石狩市文化財保護審議会への諮問に係る中間答申について. <http://dns1.city.ishikari.hokkaido.jp/uploaded/attachment/1018.pdf> (2015年3月15日アクセス確認).

石狩市文化財保護審議会，2013. これからの郷土資料の保存・展示のあり方について (答申). <http://dns1.city.ishikari.hokkaido.jp/uploaded/attachment/1019.pdf> (2015年3月15日アクセス確認).

日本ジオパークネットワーク，ホームページ. ジオパークとは. <http://www.geopark.jp/about/>

加藤有次・西源二郎・米田耕司・鷹野光行・山田英徳編，2000. 新版博物館学講座1／博物館学概論. 雄山閣出版

大原一興，2003. エコミュージアムへの旅 (第二版). 鹿島出版会.

炭鉱の記憶推進事業団，発行年不詳. 「そらちへリテージツーリズム 教育旅行プログラムのご案内」パンフレット. NPO法人炭鉱の記憶推進事業団.

The launching process of Ecomuseum in Ishikari city and its prospects
—A case study of Project M—

Takashi TSUTSUMI, Yoshihito II and Kenji SHIGA

Abstract

The aim of this paper is to analyze its launching process and prospect of 'Project M' which plans to establish the 'Ecomuseum' in Ishikari city. This project member is mainly consisted of local residents. 'Project M' was started with the activities based on the Council's report which is to protect cultural properties in Ishikari. They continued to have monthly workshops and conducted study tours for kids and adults, and an inspection tour of advanced region for Ecomuseum. This project team plans to extend the number of local members, and will select and conserve the 'Ishikari Heritages' in the near future. In order to realize this activity, Project M also considers the way to sustain their organization such as to obtain the budget and to contribute the development of the city for the next generations. This paper concludes that these activities to launch Ecomuseum may have significance in terms of growing grass-roots activities that were initiated by local communities.

Key words: ecomuseum, Project M, study tour, Ishikari Heritage, Hamamasu